織豊期主要人物居所集成

藤井譲治 編

思文閣出版

はしがき

本書は、織豊期に生きた主要人物の居所と行動を確定することを、目的に編まれたものである。

人物の居所を明らかにすることは、個々の研究者が、その時々の分析にあたって日常的に行ってきたことである。しかし、こうした作業は、個々別々に、また特定の人物、特定の時期に限ってなされるに過ぎず、その成果も研究者全体が共有しうる性格のものではない。こうした作業それ自体を研究目標とすることで、また複数の研究者によって複数の人物をとりあげることで、さらにそこで得られた知見を相互に共有することで、居所確定の情報は大きくふくらみ、結果としてより的確な、そしてより効率的な居所確定を可能とするはずである。

当初、織豊期の主要人物として、政権の中心人物(足利義昭・織田信長・豊臣秀吉)、政権中枢にいる人物(明智光秀・前田玄以・浅野長政・石田三成等)、政権に大きな影響力を持った人物(柴田勝家・徳川家康・前田利家・毛利輝元等)、有力大名(上杉景勝・伊達政宗等)、有力武将(加藤清正・福島正則・黒田孝高等)、政権周辺の僧侶・文化人(千利休・西笑承兌等)、政権に関係深い公家衆(近衛前久・吉田兼見等)、政権に関わる女性たち(北政所・淀殿・孝蔵主等)をあげ、その居所と行動を確定する作業にかかった。

作業が進行するなか、それぞれの人物によってその居所を確定するに充分な情報・史料の得られないものもあり、その居所と行動を記述する場合、基本的な事柄については、統一を図ったが、それぞれの人物についてはその特性に随って叙述することとした。

当初予定していた人物でとりあげえなかたものもあるが、付け加えた人物もある。具体的には、25名をとりあげた。織田信長・豊臣秀吉・豊臣秀次・徳川家康・足利義昭・柴田勝家・丹羽長秀・明智光秀・細川藤孝・前田利家・毛利輝元・上杉景勝・伊達政宗・石田三成・浅野長政・福島正則・片桐且元・近衛前久・近衛信尹・西笑承兌・大政所・北政所・浅井茶々・孝蔵主である。

本書に収録したこれらの人物は、この時期の主要人物ではあるが、いうまでもなくこの時期の主要人物のすべてを網羅してはおらず、現段階で一応のまとまりのついたものを収録したにすぎない。今後、とりあぐべくしてとりあげられなかった人物についても検討を進め、さらにとりあげた人物についての内容も含め、一層の充実を図りたい。なお、本書の誤りや新たな居所情報を見いだされた場合には、ぜひ一報いただければ幸いである。

なお、本書は、平成18年度から21年度にかけて「織豊期主要人物の居所と行動に関する基礎的研究」を研究課題に、科学研究費の交付を受けた研究の成果の一部であり、藤井譲治を研究代表者とし、杣田善雄・中野等・早島大祐・福田千鶴・堀新・松澤克行・横田冬彦・相田文三・穴井綾香・尾下成敏・藤田恒春の各氏に参加いただいた。

最後になりましたが、本書の刊行を引き受けて下さった思文閣出版、なかでもお世話いただいた田中峰人さんに謝意を表します。

2011年5月　　藤井譲治

目　次

はしがき
凡例／典拠・参考文献／典拠の略称
織田信長の居所と行動……堀　新……3
豊臣秀吉の居所と行動（天正10年６月２日以前）……堀　新……38
豊臣秀吉の居所と行動（天正10年６月以降）……藤井譲治……51
豊臣秀次の居所と行動……藤田恒春……84
徳川家康の居所と行動（天正10年６月以降）……相田文三……96
足利義昭の居所と行動……早島大祐……139
柴田勝家の居所と行動……尾下成敏……144
丹羽長秀の居所と行動……尾下成敏……155
明智光秀の居所と行動……早島大祐……170
細川藤孝の居所と行動……早島大祐……183
前田利家の居所と行動……尾下成敏……200
毛利輝元の居所と行動（慶長５年９月14日以前）……中野　等……220
毛利輝元の居所と行動（慶長５年９月15日以降）……穴井綾香……234
小早川隆景の居所と行動……中野　等……239
上杉景勝の居所と行動……尾下成敏……253
伊達政宗の居所と行動……福田千鶴……277
石田三成の居所と行動……中野　等……293
浅野長政の居所と行動……相田文三……308
福島正則の居所と行動……穴井綾香……332
片桐且元の居所と行動……藤田恒春……343
近衛前久の居所と行動……松澤克行……361
近衛信尹の居所と行動……松澤克行……379
西笑承兌の居所と行動……杣田善雄……404
大政所の居所と行動……藤田恒春……416
北政所（高台院）の居所と行動……藤田恒春……422
浅井茶々の居所と行動……福田千鶴……443
孝蔵主の居所と行動……藤田恒春……448
執筆者紹介

凡　例

一　本書は、織豊期の主要人物の居所と行動を個人別、編年に明らかにしようとしたものであり、対象とした人物の年譜ではない。

一　本書の各論は、対象とする人物の【略歴】、次いで【居所と行動】を年次を追って記載することを原則とした。また居所や行動が細かに判明するものについては、その【概略】をあげその後に【詳細】情報を記した。

一　【居所と行動】については、その根拠となる典拠を記すことを原則とした。

一　書誌情報が重出するのを避けるために、複数の論考にわたる典拠・参考文献等を凡例の後にあげた。なお、個別の論考についての主な典拠や参考文献は、それぞれの論考の末尾に掲げた。

一　典拠のうち頻繁に利用したものについては、略称を用いた。その一覧は典拠・参考文献の後に掲げた。

一　典拠としてあげた日記の記事が同日の場合には「同日条」等の記載を省略した。

一　引用史料等では、通用の字体を用いることを原則とした。

典拠・参考文献

【日記等】

『家忠日記』(増補続史料大成　臨川書店　1981年)

「宇野主水日記」(『石山本願寺日記』下巻　清文堂出版　1984年　初版1930年／『寺内町研究』創刊号～6号　1995年～2001年)

『梅津政景日記』(大日本古記録　岩波書店　1953年～66年)

「大和田重清日記」(『日本史研究』44～46・48・49・52　1959年～61年)

『お湯殿の上の日記』(続群書類従補遺　続群書類従完成会　1932年～34年)

『兼見卿記』(史料纂集　続群書類従完成会　1971・76年／『ビブリア』118～124・126・128・129　2002年～09年)

『義演准后日記』(史料纂集　続群書類従完成会　1976年～刊行中)

『北野社家日記』(史料纂集　続群書類従完成会　1972年～刊行中)

『北野天満宮史料　古記録』(北野天満宮史料刊行会　1980年)

『北野天満宮史料　目代日記』(北野天満宮史料刊行会　1975年)

『慶長日件録』(史料纂集　続群書類従完成会　1981年・96年)

「玄与日記」(『群書類従』18　続群書類従完成会　1932年)

『駒井日記』(文献出版　1992年)

『金剛寺文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1920年)
『西笑和尚文案』(思文閣出版　2007年)
『相良家文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1917年・18年)
『真田家文書』(長野市　1981年～83年)
『島津家文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1942年～66年)
『大徳寺文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1943年～85年)
『伊達家文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1908年～14年)
『蜷川家文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1981年～96年)
『萩藩閥閲録』(山口県文書館　1967年～89年)
『益田家文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　2000年～刊行中)
『毛利家文書』(大日本古文書　東京大学史料編纂所　1920年～24年)
『歴代古案』(史料纂集　続群書類従完成会　1993年～2002年)

【編纂物】
「安土日記」(写本あり)
『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(同朋舎出版　1987年～98年)
「家忠日記追加」(写本あり)
『寛永諸家系図伝』(続群書類従完成会　1980年～97年)
『寛政重修諸家譜』(続群書類従完成会　1964年～92年)
『鹿児島県史料　旧記雑録後編』1～4(鹿児島県維新史料編さん所　1981年～84年)
『公卿補任』3(新訂増補国史大系　吉川弘文館　1974年)
『慶長年録』(内閣文庫所蔵史籍叢刊　汲古書院　1986年)
『慶長見聞録案紙』(内閣文庫所蔵史籍叢刊　汲古書院　1986年)
『元和年録』(内閣文庫所蔵史籍叢刊　汲古書院　1986年)
『史料綜覧』10～17(東京大学史料編纂所　1938年～63年)
『信長公記』(角川書店　1969年)
「池田家文庫本信長記」(福武書店　1975年)
『駿府記』(史籍雑纂　続群書類従完成会　1994年)
『太閤記』(新日本古典文学大系　岩波書店　1996年)
『大日本史料』第10編・第11編・第12編(東京大学史料編纂所　1900年～刊行中)
『伊達治家記録』1～4(仙台藩史料大成　宝文堂　1972年～74年)
『朝野旧聞裒藁』7～10(内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊1　汲古書院　1983年)
『当代記』(史籍雑纂　続群書類従完成会　1994年)
『東武実録』1(内閣文庫所蔵史籍叢刊　汲古書院　1981年)
『徳川実紀』1・2(新訂増補国史大系　吉川弘文館　1964年)

『譜牒余録』中(国立公文書館内閣文庫　1974年)
『武徳編年集成』上(名著出版　1976年)
『日本史』(ルイス・フロイス著　松田毅一・川崎桃太訳　中央公論社　1977年～80年)
『豊大閤真蹟集』(東京大学史料編纂所　1938年)
『綿考輯録』1・2(出水神社　1988年)
『蓮成院記録』(増補続史料大成　臨川書店　1978年、『多聞院日記』と合冊)

【研究書】

奥野高広編『増訂織田信長文書の研究』(吉川弘文館　1988年、初版1969年・70年)
高木昭作監修・谷口克広著『織田信長家臣人名辞典』(吉川弘文館　1994年)
中村孝也編『徳川家康文書の研究』(日本学術振興会　1958年～71年)
中村孝也編『新訂版徳川家康文書の研究』(日本学術振興会　1980年～82年)
徳川義宣編『新修徳川家康文書の研究』(徳川黎明会　1983年・2006年)
三鬼清一郎編『稿本豊臣秀吉文書(1)』(神奈川大学生活協同組合印刷部　2005年)

【自治体史】

『愛知県史』資料編11織豊1・2(愛知県　2003・2007年)
『青森県史』資料編中世1・近世1(青森県　2004・2001年)
『秋田県史』資料古代・中世編(秋田県　1961年)
『岩手県史』3(岩手県　1961年)
『神奈川県史』資料編3古代・中世3下(神奈川県　1979年)
『岐阜県史』史料編古代・中世1・4・補遺(岐阜県　1961・1973・1999年)
『新編埼玉県史』資料編6中世(埼玉県　1980年)
『佐賀県近世史料』1編1巻(佐賀県立図書館　1993年)
『佐賀県史料集成』古文書編4・7(佐賀県立図書館　1959・1963年)
『静岡県史』資料編8中世4(静岡県　1996年)
『信濃史料』17・18巻(信濃史料刊行会　1961・1962年)
『上越市史』別編1・2上杉氏文書集一・二(上越市　2003・2004年)
『仙台市史』資料編10～13伊達政宗文書1～4(仙台市　1994～2007年)
『栃木県史』史料編中世3(栃木県　1978年)
『富山県史』史料編Ⅱ・Ⅲ中世・近世上(富山県　1975・1980年)
『新潟県史』資料編3中世1(新潟県　1982年)
『兵庫県史』史料編中世2・9(兵庫県　1987・1997年)
『広島県史』古代中世資料編Ⅱ～Ⅴ(広島県　1976～1980年)
『広島県史』近世資料編Ⅱ(広島県　1976年)

『福井県史』資料編３中・近世１（福井県　1987年）
『福岡県史』近世史料編柳川藩初期（上）・福岡藩町方（一）（西日本文化協会　1986・1987年）
『福島県史』７資料編２古代・中世資料（福島県　1966年）
『三重県史』資料編近世１（三重県　1993年）
『宮崎県史』史料編中世１（宮崎県　1990年）
『山形県史』１・２（山形県内務部　1920年）
『山口県史』史料編中世２・３・近世１下（山口県　2001・2004・1999年）
『山梨県史』資料編　近世１（山梨県　1998年）

【古書目録】
『思文閣古書資料目録』（思文閣出版古書部）
『思文閣墨蹟資料目録』（思文閣）

典拠の略称

【日記等】
『大日本史料』第十二編之五
→『大日本史料』12－5
『家忠日記』→『家忠』
「宇野主水日記」→「宇野」
『梅津政景日記』→『梅津』
「大和田重清日記」→「大和田」
『お湯殿の上の日記』→『お湯殿』
『兼見卿記』→『兼見』
『兼見卿記』別本→「別本兼見」
『義演准后日記』→『義演』
『北野社家日記』→『北野社家』
『北野天満宮史料　古記録』→『北野古記録』
『北野天満宮史料　目代日記』→『北野目代』
『慶長日件録』→『慶長』
「玄与日記」→「玄与」
『駒井日記』→『駒井』
『三藐院記』→『三藐』
『慈性日記』→『慈性』
『舜旧記』→『舜旧』
「尋憲記」→「尋憲」
「宗及茶湯日記　自会記」→「宗及自会記」
「宗及茶湯日記　他会記」→「宗及他会記」
「宗湛日記」→「宗湛」
「孝亮宿禰記」→「孝亮」
『多聞院日記』→『多聞院』
「親綱卿記」→「親綱」
「天正記」（「輝元公上洛日記」）
→「輝元上洛日記」
『言緒卿記』→『言緒』
『言継卿記』→『言継』
『言経卿記』→『言経』
『時慶記』→『時慶』
「二条宴乗日記」→「二条」
『晴豊記』→『晴豊』
『本光国師日記』→『本光』
「光豊記」→「光豊」
『鹿苑日録』→『鹿苑』

【古文書】

『浅野家文書』→『浅野』

『石清水文書』→『石清水』

『石見吉川家文書』→『石見吉川』

『上杉家文書』→『上杉』

『賀茂別雷神社文書』→『賀茂』

『北野天満宮史料　古文書』→『北野古文書』

『吉川家文書』→『吉川』

『朽木家文書』→『朽木家』

『黒田家文書』→『黒田』

『小早川家文書』→『小早川』

『高野山文書』→『高野山』

『金剛寺文書』→『金剛寺』

『西笑和尚文案』→『西笑』

『相良家文書』→『相良』

『真田家文書』→『真田』

『島津家文書』→『島津』

『大徳寺文書』→『大徳寺』

『伊達家文書』→『伊達』

『蜷川家文書』→『蜷川』

『萩藩閥閲録』→『閥閲録』

『益田家文書』→『益田』

『毛利家文書』→『毛利』

『歴代古案』→『歴代』

【編纂物】

「安土日記」→「安土」

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』
→『イエズス会』

「家忠日記追加」→「家忠追加」

『寛永諸家系図伝』→『寛永伝』

『寛政重修諸家譜』→『寛政譜』

『鹿児島県史料　旧記雑録後編』
→『薩藩旧記』

『公卿補任』→『公卿』

『慶長見聞録案紙』→『見聞録案紙』

『信長公記』→『公記』

「池田家文庫本信長記」→「池田本信長記」

『駿府記』→『駿府』

『太閤記』→『太閤』

『伊達治家記録』→『治家記録』

『朝野旧聞裒藁』→『朝野』

『当代記』→『当代』

『東武実録』→『東武』

『徳川実紀』→『実紀』

『譜牒余録』→『譜牒』

『武徳編年集成』→『武徳』

『豊大閤真蹟集』→『豊大閤』

『綿考輯録』→『綿考』

『蓮成院記録』→『蓮成院』

【研究書】

『増訂織田信長文書の研究』→『増訂信長』

『織田信長家臣人名辞典』→『信長人名』

『徳川家康文書の研究』→『家康』

『新修徳川家康文書の研究』→『新修家康』

『新訂版徳川家康文書の研究』→『新訂家康』

『稿本豊臣秀吉文書（１）』→『秀吉』

【自治体史】

『愛知県史』資料編11織豊１→『愛知織豊１』

『青森県史』資料編中世１→『青森中世１』

『秋田県史』資料古代・中世編
→『秋田古代中世』

『岩手県史』３→『岩手』

『神奈川県史』資料編３古代・中世３下
→『神奈川』

『岐阜県史』史料編古代・中世１
→『岐阜古代中世１』

『新編埼玉県史』資料編６中世→『埼玉６』

『佐賀県近世史料』第１編第１巻
→『佐賀近世１』
『佐賀県史料集成』古文書編４
→『佐賀古文書４』
『静岡県史』資料編８中世４→『静岡』
『信濃史料』17巻→『信濃17』
『上越市史』別編１上杉氏文書集一
→『上越別１』
『仙台市史』資料編10伊達政宗文書１
→『政宗１』
『栃木県史』史料編中世３→『栃木中世３』
『富山県史』史料編Ⅱ中世→『富山・中世』
『新潟県史』資料編３中世１→『新潟中世１』
『兵庫県史』史料編中世２→『兵庫中世２』
『広島県史』古代中世資料編Ⅱ
→『広島古代中世Ⅱ』
『福井県史』資料編３　中・近世１
→『福井中・近世１』
『福岡県史』近世史料編　福岡藩町方(一)
→『福岡町方１』
『福島県史』７資料編２古代・中世資料
→『福島』
『三重県史資料編近世１』→『三重近世１』
『宮崎県史』史料編中世１→『宮崎中世１』
『山形県史』巻１→『山形巻１』
『山口県史』史料編中世２→『山口中世２』
『山梨県史』資料編　近世１』
→『山梨近世１』

【古書目録】
『思文閣古書資料目録』→『思文閣古書』
『思文閣墨蹟資料目録』→『思文閣墨蹟』

豊臣秀吉の居所と行動(天正10年6月以降)

藤井譲治

【略歴】

秀吉は、天文5年(1536)あるいは天文6年2月6日、尾張愛智郡中村に生まれたとされる。生年については、桑田忠親氏が、天正18年(1590)12月吉日の石通白杉本坊宛伊藤秀盛の願文に「関白様　酉之御年　御年五十四歳」とあることから天文6年とされるが、北野社に慶長2年(1592)3月1日に奉納された釣燈籠の銘には「御歳丙申為御祈禱也」とあり、天文5年の可能性もある。

信長に仕え、永禄8年(1565)以前に木下藤吉郎秀吉を名乗り、天正元年7月ころ信長から羽柴の姓を与えられる。天正3年には筑前守を名乗るが、朝廷からの諸大夫叙任がなされたものではないようである。

残された口宣案によれば、天正10年10月3日従五位左近衛権少将、11年5月22日従四位下参議に叙任されているが、天正12年11月21日従三位大納言叙任にあたって遡り叙任されたものであり、朝廷の実質的位階は、大納言叙任が最初である。ついで天正13年3月10日従二位内大臣、7月11日従一位関白に叙任された。天正14年12月19日太政大臣任官にさいし「豊臣」姓を朝廷から与えられる。

天正19年12月25日に、関白職を秀次に譲り(『公卿補任』は秀次の関白任官を12月28日とする)、以降「太閤」を通称とし、慶長3年8月18日に伏見城で死去する。

山崎の戦いの後、山崎に城を築き畿内支配の拠点とするが、天正11年5月には、池田恒興より大坂を請取り本拠とし、そこに城郭を築いた。天正14年2月に京都内野に城郭を築くため縄打ちを行い、それを聚楽と名付け、翌年9月13日に移徙し、本城とした。関白を秀次に譲るにあたって、聚楽を秀次に渡し、みずからの居所を再び大坂城に定める。天正20年8月ころ伏見指月に隠居所として縄張りがなされ、翌年閏9月に移徙。ついで、秀頼の誕生を機に拡張工事がなされ、文禄5年(1596)には完成をみるが、同年閏7月13日の大地震で、ことごとく倒壊した。地震後、城地を伏見木幡山に移し再建に取りかかり、翌慶長2年5月に秀頼とともに移徙した。また、同年4月に禁裏の東南に新城が計画され、9月には一応の完成をみたようである。

この他、天正11年の賤ヶ岳の戦い後に坂本城を手にし、しばしばそこを訪れた。また同15年には、坂本城を廃し大津城を築いている。

【居所と行動】

天正10年(1582) 6月～12月

【概要】

秀吉は、本能寺の変が起こった天正10年6月2日には備中高松に在陣し、5日高松を発ち、7日に姫路着、9日姫路を発ち、13日山崎で明智光秀を滅ぼし、同日京都、翌日は近江、その後美濃・尾張へ出陣、6月27日清洲会議。7月9日京都着。その後山城山崎を拠点とし、京都・山崎間を行き来するほか、姫路・丹波亀山に出かけている。12月7日、美濃に向けて出陣、同月28日に京都に帰陣。

【詳細】

6月4日備中高松在(『当代』)。5日高松在(9月20日付下国愛季宛秀吉書状「高松与申城江(中略)同五日迄対陣仕(中略)同七日ニ播州姫路之城へ打入、同九日より京都へ切上、十二日ニ城州於山崎表及一戦」「秋田家文書」)。5日野殿を経て沼着(同日付中川清秀宛秀吉書状「尚々の殿迄打入候之処御状披見申候、今日成次第ぬま迄通申候」「梅林寺文書」)。6日姫路着(8日付松井康之宛杉藤七書状「去六日ニ至姫路秀吉馬被納候」「松井家譜」、前掲9月20日付下国愛季宛書状では7日)。9日姫路発(前掲9月20日付下国愛季宛秀吉書状)。同日大明石・兵庫着(11日付松井友閑宛秀吉書状「一昨九日至大明石令発足(中略)夜中ニ兵庫まて着陣候、則尼崎迄打出候条」「荻野由之氏所蔵文書」)。10日淡路岩屋へ渡海を報じるが渡海せず(9日付広田内蔵丞宛秀吉書状「洲本城へ菅平右衛門入城之由注進候間、只今午刻至大明石令着陣候、明日渡海彼城取巻可責干候」「広田文書」 9日付安宅信康宛秀吉書状「我々明日岩やまて先可令渡海覚悟候へハ」「豊国社祠萩原文書」)。11日尼崎着(18日付岡本次郎右衛門尉他1名宛秀吉書状「一日一夜に播州姫路へ打入候事(中略)夜昼なしに十一日之辰刻ニ尼崎迄令著陳」「金井文書」)。12日富田着(前掲18日付岡本次郎右衛門尉他1名宛秀吉書状写「同十二日ニ(中略)富田ニ一夜陳相懸申候事」、14日付川田彦右衛門外1名宛秀吉書状「同十二日富田ニ一夜致在陣」「松花堂所蔵古文書集」)。13日山崎の戦い(前掲18日付岡本次郎右衛門尉他1名宛秀吉書状写「其十三日之晩ニ山崎ニ陳取申候」)。同日京都着(『言経』「羽柴筑前守従播磨国上洛了、本国寺ニ被居了」)。14日三井寺在(『兼見』「羽柴筑前守(中略)今日三井寺陣所也」)。18日近江在陣(『多聞院』)。23日ころ美濃在(同日付美濃立政寺宛秀吉禁制「立政寺文書」)。27日清須在(清洲会議)。28日津嶋、石たて、早尾を通り長浜に帰城(28日付高木貞利宛秀吉書状「爰元隙明候条、今日津嶋をとをり晩ニハ石たてはや尾ニ令着陣、それより長浜帰城候」「高木文書」)。

7月3日・4日長浜在(『兼見』4日付稲勘右宛秀吉書状「至長浜帰城候」「小川文書」)。9日京都着(11日付鍋嶋信生宛秀吉書状「一昨日九日令上洛、近日至播州姫路可帰城候」「鍋島文書」、ただし『蓮成院』「於京都羽柴筑前守諸礼被請之間、従寺門モ可有御音信旨」、『多聞院』8日条「今日城介殿若子三才羽柴筑前守御伴ニテ在京、諸大名衆礼在之云々」、さらに『兼見』10日条には「今夕羽柴筑前守上

洛云々、六条本国寺陣所也」とある)。11日京都在(『兼見』『言経』)。12日京都在(『多聞院』13日条)。13日播磨下向の噂あるも在京(『言経』)。17日在京(『兼見』)。19日在京(『兼見』)。20日山崎在(『兼見』「佐出筑州(佐竹出羽守)へ礼之儀相調、山崎へ下向対面之由」)。24日京都発丹波亀山へ(『兼見』「羽柴筑州下向丹州亀山云々」)。

8月3日亀山より姫路着(4日付石彦宛秀吉書状「我等も昨日三日播州姫路迄令帰城候」「今村文書」、8日付細川藤孝宛秀吉書状「丹州より直至姫路令帰候」「細川文書」)。11日近く山崎へ(同日付丹羽長秀宛秀吉書状「軈而山崎へ可罷越候間」「専光寺文書」)。19日京都在(『言経』)。

9月15日山崎在(『言経』)。17日京都着(『言経』「羽柴筑前守丹羽五郎左衛門尉已下上洛了」)。18日から21日までは在京(『兼見』『言経』18日条)。24日山崎在(同日付森野惣七宛秀吉書状「其方女子共之事、我等山崎ニ在城候間」「佐藤行信氏所蔵文書」)。26日山崎在(『多聞院』)。

10月1日姫路在(同日付羽柴秀長宛秀吉書状「廿九日之書状今日於姫路令披見候」『伊予古文』)。13日亀山を経て京都着(『兼見』「羽柴筑州至丹州亀山上洛云々」、また『兼見』14日条には「羽柴筑州至六条上洛云々」とある)。15日京都在(『兼見』『言経』『晴豊』)。同日山崎へ(『言経』「羽柴筑前守山崎城へ」)。16日山崎在(「宇野」)。19日山崎在(『兼見』)。23日山崎在(『多聞院』)。27日京都着(「宇野」「羽筑山崎ノ城より上洛」)。28日京都在(『兼見』『蓮成院』)。29日京都在(「宇野」)。

11月3日山崎着(『兼見』「羽柴筑州下向山崎云々」)。10日京都在(『兼見』)。12日山崎在(『兼見』)。23日山崎在(『多聞院』「順慶山崎今朝越了」)。

12月3日京都着(『兼見』「羽柴筑州上洛、三条伊藤宿所也」)。4日京都在(『兼見』)。5日京都在(『兼見』)。7日京都発(『兼見』「羽柴筑州至江州出勢」)。9日勢田、安土を経て11日佐和山着(18日付宇喜多秀家宛秀吉書状「一三介殿為御迎去九日令出張候、路次中城々始勢田之城安土江州之内山崎ニ人数入置、十一日ニ至佐和山令着城候事」『小早川』)。13日佐和山在(『多聞院』)。16日大垣着(前掲18日付宇喜多秀家宛秀吉書状「一昨日十六日濃州大垣之城へ我等令着城候」)。28日京都着(『兼見』27日条「今度濃州表出陣羽筑州・惟五郎左衛門帰陣云々、羽筑明日帰陣上洛之由申了」)。

天正11年(1583)

【概要】

秀吉は、正月を山崎で迎えたようである。閏1月には丹波亀山、安土へ出向き、15日には上洛。2月～4月は、近江と北伊勢で軍事行動を展開し、21日賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破り、軍を越前に進め、28日に金沢城に入り、そこで馬を返し、5月11日に坂本に帰る。6月1日上洛。この直後、居城を山崎から大坂に移す。10日には播磨へ。28日ころまで姫路。その後大坂に戻り、7月は大坂、京都、坂本と居を移す。8月4日大津より大坂へ、19日から27日まで有馬在。9月・10月は大坂在。24日は有馬在。11月はじめに亀山に行き6日大坂へ、8日に京都着。その後坂本に行き、12月は大坂におり、越年。

【詳細】

1月2日山崎在(『多聞院』「筒井ニハ山崎へ礼ニ被越了云々」)。閏1月4日丹波亀山より京都着(『兼見』「羽柴筑州至丹波亀山上洛了」)。12日ヵ安土へ(『多聞院』「順慶法印従四日(織田信雄)御本所アッチへ

原披見候」『吉川』)。20日清見寺着(『武徳』「廿日秀吉駿州清見寺ニ至り倭歌ヲ賦ル」)。20日駿府着(22日付山中長俊書状「殿下様一昨日廿日駿府へ御着座候」「喜連川文書」)。23日遠江掛川着(同日付藤堂高虎宛秀吉朱印状「今日遠州至懸川納馬候」『宗国史』)。30日佐保山(『晴豊』「今日関白佐保山迄東国陣より上洛被申候」)。

9月1日京都着(『兼見』『晴豊』『お湯殿』「けふくわんはく殿かいちんにて」)。2日京都在(『晴豊』)。4日京都在(『お湯殿』)。8日京都在(『晴豊』)。11日聚楽在(同日付浅野長吉宛秀吉朱印状「去月十八日書状通今日十一至聚楽到来」『浅野』)。15日京都在(『晴豊』)。16日京都在(『お湯殿』)。18日京都在(『兼見』『晴豊』)。23日京都在(「宗凡他会記」「九月廿三日朝、於聚楽、殿下様御茶被下候」)。25日京都発淀へ(『兼見』「殿下為御湯治、今日至淀御下向」)。

10月3日有馬在(『北野社家』「関白様陽(湯)の山ニ御座候を御見舞ニ被下候也」)。6日有馬在(7日付浅野長吉宛秀吉朱印状「去月十四日之書状今月六日於有馬湯山到来」「大阪城天守閣所蔵文書」)。14日大坂着(『言経』「殿下従湯山大坂へ御帰也云々」)。16日大坂在(『言経』)。19日大坂発(『言経』「殿下和州へ御出、明日御上洛也云々」)。19日郡山着(『多聞院』20日条「関白殿昨日見廻ニ御越也」)。20日郡山発(『多聞院』「今暁秀長ハ死去、依之秀吉ハ朝飯モ不食早旦ニ被帰了」)。28日京都在(『兼見』)。29日京都在(『兼見』)。

11月3日京都在(『お湯殿』『兼見』『晴豊』)。7日京都在(『晴豊』『北野社家』)。16日京都在(『兼見』)。18日京都在(『お湯殿』)。20日京都在(『晴豊』)。

12月5日京都在(『兼見』)。16日京都在(『北野社家』「関白様ゑそ嶋ノ者礼ニ上候也」)。27日京都在(『兼見』『晴豊』)。

天正19年(1591)

【概要】

この年12月関白職を秀次に譲る。多くを京都に過ごすが、閏1月と11月に尾張・三河に鷹野。秀吉は正月を京都で迎える。8日淀へ。12日京都在。閏1月11日京都発、尾張へ鷹野。17日清須在。23日三河吉良鷹野。26日清須在。2月3京都着。3月15日宇治へ。17日京都着。4月4日京都在。5月15日京都在。6月3日京都在。7月11日大津より京都着。17日淀へ。27日淀へ。8月2日淀へ。5日東福寺、捨死去。6日東福寺在。7日から9日清水寺在。10日京都発有馬へ。18日大坂着。25日京都着。以降京都在。9月26日京都発大坂へ。10月12日京都着。11月3日京都発美濃・吉良へ。12月5日吉良在。15日大津在。16日京都着。25日大坂へ。27日京都着。

【詳細】

1月3日京都在(『晴豊』)。4日京都在(『兼見』)。5日京都在(『兼見』)。6日京都在(『兼見』)。7日京都在(『兼見』)。8日山城淀へ(『時慶』「殿下淀へ御越ト云々」)。12日京都在、参内(『兼見』『時慶』『お湯殿』『晴豊』)。13日京都在(『兼見』)。14日京都在(『兼見』『晴豊』『時慶』『北野社家』)。16日京都在(『兼見』「殿下東川原へ御成」)。18日京都在(『晴豊』)。19日京都在(『時慶』「殿下尾州へ御鷹野(中略)延引」)。28日京都在(『時慶』)。

氏所蔵文書」「毛利家博物館蔵文書」「山田覚蔵氏所蔵文書」「吉田良正氏所蔵文書」「能松佐太郎氏所蔵文書」「吉村文書」「米沢元建氏所蔵文書」「立政寺文書」「龍造寺文書」「脇坂文書」

【日記】

『家忠』「宇野」『雲厳院内府公維公記』『お湯殿』『兼見』『義演』『北野社家』『北野目代』『駒井』『舜旧』「孝亮」『多聞院』「親綱」『言経』『時慶』『晴豊』『蓮成院』『鹿苑』

【記録】

「家忠追加」『景勝公御年譜』『華頂要略』『貝塚天満移住記』『吉川史臣略記』「九州御動座記」『治家記録』『宗国史』『太閤』『伊達政宗記録事蹟考記』『当代』『姫路城史』『武家事紀』『武徳』『譜牒』中巻

「今井宗久茶湯書抜」「伊予古文」「上杉家記」「越佐史料稿本」「大友家文書録」「景勝公諸士来書」「加藩国初遺文」「己行記」「木島コレクション」「吉川家譜」「玉証鑑」「外宮引付」「古簡雑纂」「古今消息集」「御上洛日帳」「古文書纂」「薩藩旧記後集」「嗣封録」「常総遺文」「士林証文」「寸金雑録」「水月古鑑」「宗久茶湯日記」「増補筒井家記」「創業記考異」「豊臣秀吉九州下向記」「難波創業記」「編年史料稿本」(東大史料)「北徴遺文」「松井家譜」

【参考文献】

粟野俊之『織豊政権と東国大名』(吉川弘文館　1993年)

桑田忠親『豊臣秀吉研究』(角川書店　1975年)

小林清治『奥羽仕置と豊臣政権』(吉川弘文館　2003年)

曽根勇二『近世国家の形成と戦争体制』(校倉書房　2004年)

藤田達生編『小牧・長久手の戦いの構造』(岩田書院　2006年)

藤田恒春『豊臣秀次の研究』(文献出版　2003年)

織豊期主要人物居所集成（しょくほうきしゅようじんぶついどころしゅうせい）

2011（平成23）年6月30日発行

編　者
藤井譲治

発行者
田中周二

発行所
株式会社 思文閣出版
〒605-0089　京都市東山区元町355　電話 075（751）1781（代）

定価：本体6,800円（税別）

印　刷
製　本　亜細亜印刷株式会社

©Printed in Japan, 2011
ISBN978-4-7842-1579-9　C3021